

・須坂クラシック美術館・



大通りの道がこの家で曲がっていますが、本当はまっすぐ行く予定でした。保存したいと市民一丸となって頑張りました。

建った当時は、須坂病院も塀もありません。門をくぐると、庭が広がっていて庭を見渡し、玄関に入りました。ガラスが歪んでますが、建てられたのが明治13年、日本に板ガラスが入ったのが明治10～30年代なので、輸入物です。



お客さんが最初に見る光景です。2階がないので天井が高く、鴨居が大きくて立派です。最初にこういった物を見せることによって、商売の相手に「信用できる」と思わせる造りになっています。



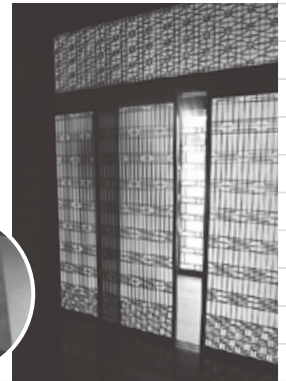
夏をいかに涼しく過ごすかに趣をおいたと聞いたことがあります。風通しよく涼しく。なので、窓の下も開くようになってます。冬はしんと寒いので、着る物を着て堪え忍べということらしいです。

昔店舗だった部屋です。現在ショーケースになっている方向が、銀座通りになります。どう差しが、幅が60cmで長さが10mというご神木クラスの太い柱を使っています。昔は通り沿いで一面戸でした。太い柱を使うと、間に柱がいらず、お客さんが入りやすい店作りになっています。



店舗の2階、倉庫。当時は天板がありましたが、立派な梁が出てきたので出したまま保存してあります。左右の一本の梁を別の梁が支えているんですが、上下上下になっています。力の分散ですね、上手く曲がったものを利用して使っています。

商談部屋は、組子もおしゃれに出来ていて、部屋の4箇所には鶴の釘隠しがあり、他に松・亀など縁起の良い物が隠れています。奥の部屋は、使いの者の控え室です。商談で主人が手を叩くと出てきます。ガラスが細かく分かれています。高価だったので割れても小さく交換で済む様に工夫されています。



自分の生活は質素儉約。お客さんが見えるところは豪華に、それが良く解るのが階段です。総けや木の階段と言われていますが、お客さんが通る方向はケヤキ材、目の高さの所に、玉杓（たまもく）という高い木を使っています。反対側は松材、本当に両極端になります。



須坂騒動

江戸時代に縛り付けられていた農民が、明治維新で期待しましたが変わらず、一気に不満が爆発して、市内のお金持ちの家に火をつけました。以来この通りのお宅は火災になっても家が残るように、土壁になったと言われています。

プライベートな空間ですが、唯一他の場所と違うのが、抜け道があります。須坂騒動の時、怖い思いをした家主が作ったと思われる。

